

下福増遺跡

県営ほ場整備事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書

1990

石川県立埋蔵文化財センター

下福増遺跡

県営ほ場整備事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書

石川県立埋蔵文化財センター



SD-B1〔旧河道〕西より撮影

例 言

- 1 本書は県営ほ場整備事業旭地区に係る石川県松任市下福増遺跡発掘調査報告書である。
- 2 調査は石川県農林水産部耕地整備課との協議に基づき、同課より依頼を受けた石川県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 現地調査は昭和63年7月25日から同年9月1日（第1次調査）、および平成元年10月16日から同年11月6日（第2次調査）にかけて実施した。第1次調査は福島正実（石川県立埋蔵文化財センター主事）、第2次調査は鳥越浩（同）が担当した。
- 4 調査費用は県耕地整備課が負担したほか、文化庁補助金の交付を受けた。
- 5 遺物整理（洗浄、記名・分類・接合、復元、実測、トレース）は㈲石川県埋蔵文化財保存協会に委託して実施した。
- 6 本書の執筆は鳥越、福島が行った。なお、挿図、図版の指示は以下の通りである。
 - (1) 方位は公共座標系による。
 - (2) 遺物図版の縮尺は不同である。
 - (3) 遺構記号を使用する場合は以下の通りとした。
SB：掘立柱建物 SD：溝 SE：井戸 SI：堅穴 SX：その他の遺構
- 7 本発掘調査で出土した埋蔵文化財および記録資料は石川県立埋蔵文化財センターが保管している。

目 次

I 位置と環境	1
II 調査の経緯と経過	5
III 調査の概要	5
IV 遺構、遺物	5

挿図目次

1	第1図	松任市の位置	1
2	第2図	周辺遺跡分布状況	3
3	第3図	下福増遺跡周辺地形図〔1/3,000〕(県営ほ場整備事業着工前)	6
4	第4図	各調査区位置図〔1/3,000〕(県営ほ場整備事業による新区画)	7
5	第5図	各調査区全体図集成〔1/320〕(網線部は旧河道)	8
6	第6図	A調査区遺構図〔1/120〕	10
7	第7図	A, B, C調査区遺構図〔1/120〕	11
8	第8図	E, F調査区遺構図〔1/120〕	12
9	第9図	各調査区出土遺物実測図(1)〔1/3〕	13
10	第10図	各調査区出土遺物実測図(2)〔1/3〕	14
11	第11図	各調査区出土遺物実測図(3)〔1/3、26のみ1/2〕	15

図版目次

1	図版1上	A調査区全景(北端(A-0付近)より撮影)
2	図版1下	A調査区A-56以南近景(北(A-50付近)より撮影)
3	図版2上	SD-A2(南西より撮影)
4	図版2下	SD-A3〔旧河道〕(南西より撮影)
5	図版3上	B調査区全景(西端(B-0付近)より撮影)
6	図版3下	SD-B1〔旧河道〕(北西より撮影)
7	図版4上	B調査区近世以降旧河道東岸(B調査区東端より撮影)
8	図版4下	C調査区C-0~84.5近景(北端(C-0付近)より撮影)
9	図版5上	C調査区C-130~150旧河道(南端(C-150付近)より撮影)
10	図版5下	D調査区全景(南東端(D-0付近)より撮影)
11	図版6上	E調査区全景(西端(E-0付近)より撮影)
12	図版6下	E調査区旧河道1西岸(西(E-95付近)より撮影)
13	図版7上	E調査区旧河道1西岸(E調査区東端(E-115付近)より撮影)
14	図版7下	F調査区全景(西端(F-0付近)より撮影)
15	図版8上	F調査区旧河道2(F調査区西端(F-0付近)より撮影)
16	図版8下	F調査区旧河道2調査風景(F調査区西端(F-0付近)より撮影)
17	図版9上	F調査区旧河道3(東(F-65付近)より撮影)
18	図版9下	F調査区旧河道3流木出土状況(北(F-55付近)より撮影)
19	図版10	各調査区出土遺物(1)
20	図版11	各調査区出土遺物(2)

I 位置と環境

1 地理的環境

下福増遺跡は、金沢平野の中でも伏見川以南を占める手取扇状地のほぼ扇端部北端に位置する。

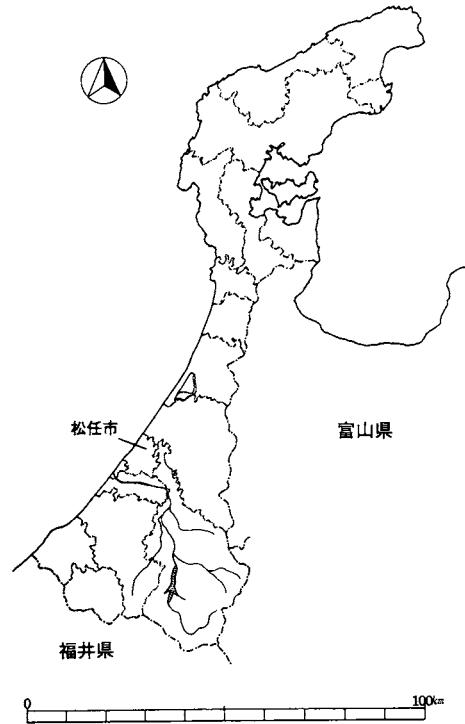
手取川はその源を霊峰白山に発し、連峰の山々より流れ出る大日川・尾添川・直海谷川等の大小無数の支流を集めて北に流れ、石川郡鶴来町地域で大きく流向を西に転じて日本海に入る。この手取川は、鶴来において山地を離れると、見事な扇状地を形成する。この扇状地はほぼ鶴来町を扇頂とし、半径約13km内外、扇開角約110度を測り、その等高線がそれぞれ間隔に多少の差はあるものの、ほぼ円周に近い形になっており、まさに典型的な扇状地である。また、扇端部は地下水の自填地帯となっており低湿な地域が広がっている。

手取川はその流域に崩壊しやすい砂岩・礫岩・頁岩を含む「手取統」と呼ばれる後期中生代層が分布するため、古来暴れ川で知られた。「手取川

は、その水路を七度変えた」との伝承があり、『皇国地誌』には七ヶ用水は「手取ノ分流」と記してある。古墳時代～平安時代には「比叡河」と呼ばれ、扇中央線付近を流れていたとみられている。平安時代～鎌倉時代頃には、大行幸川（大慶事川）が手取川の本流となった。南北朝ないし室町前期頃から南へ分流を始めて中島用水のもとである北川となり、下流で比良瀬川となっていたとみられる。室町時代には比良瀬川水系が本流となり、戦国期にはさらに南へ分流を始めたようである。戦国中期以降は「北川」「今湊川」を本流として西に流れていたが、藩政初期の頃から南へ流れを分けたようである。これが当時「南川」と呼ばれ、現在の「手取川」となる。つまり藩政前期には、手取川は南北二流を成していたのである。有史以降南へ南へと移動した手取川は、寛文～天和頃に現在の流路に落ち着いたようである。

さて、本遺跡周辺は全国的にも有名な早場米産地である。その地形は県営ほ場整備事業が終了した現在では、ほぼ平坦地化している。しかしながら実際には、低湿地と微高地と微低地が複雑に入り組んだ微細な地形変化を示す地域であったことが、昭和20年代以降の遺跡調査によって明らかにされている。

近年手取扇状地は、松任市域を中心に金沢市のベッドタウンとしての振興住宅地の造成や、工場用地の造成、それに伴う市街地の道路改良や幹線道路の新設などと、その発展には目を見張るものがある。周辺の景観も、ここ数年で大きく変わりつつあり、それに伴う遺跡の調査が急増する一方で、その保存が困難になりつつある。



第1図 松任市の位置

2 歴史的環境

手取扇状地では、原始・古代の遺跡が扇央後線の北側に集中している。特に本遺跡が立地する金沢市・野々市町・松任市の境界付近は、県下でも有数の遺跡密集地域である。このことは手取川が氾濫を繰り返しながら南遷したために、扇央後線より北側の地域が南側に比べて氾濫の被害を受けることが少なかったことを、考古学的に物語るものである。

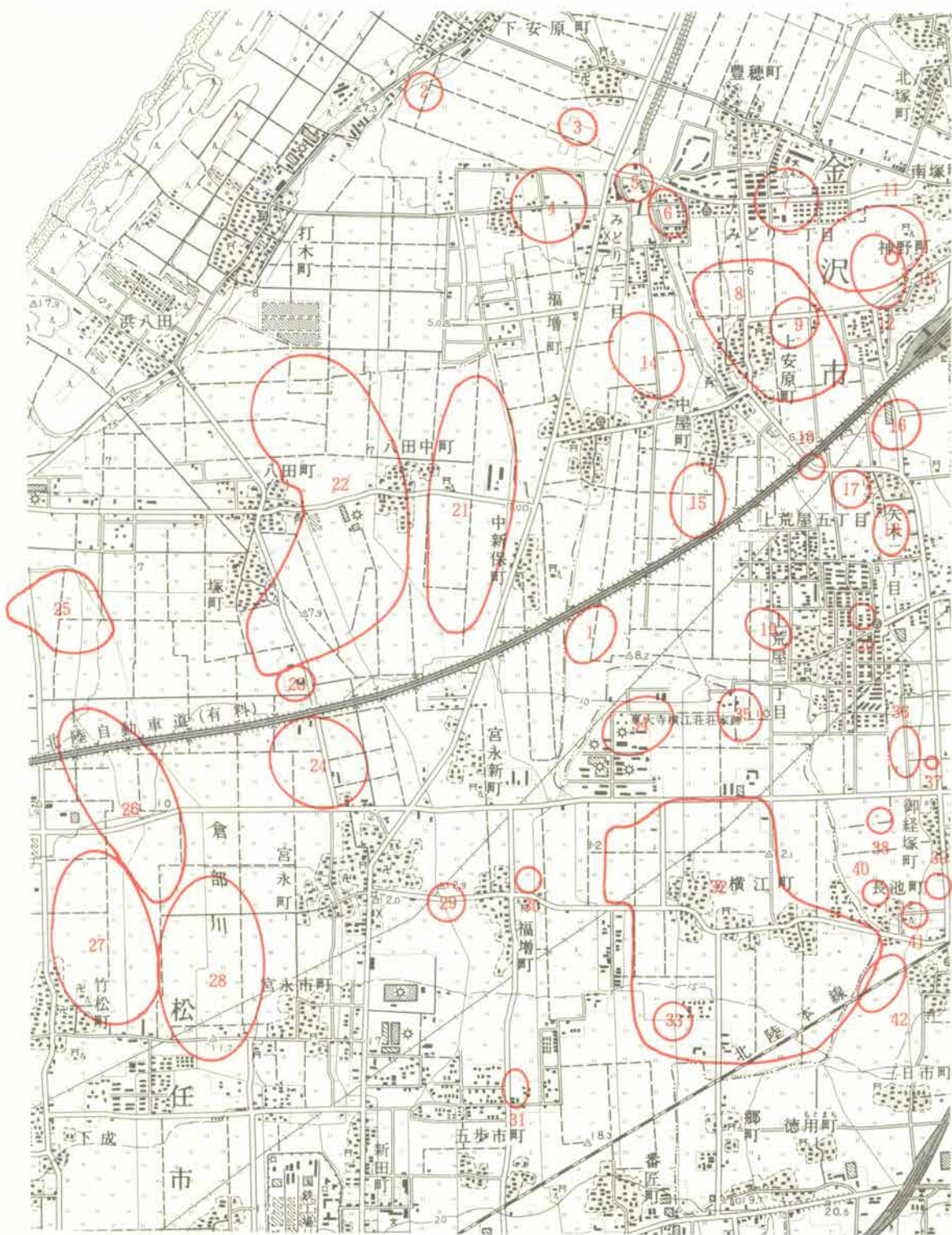
縄文時代 本遺跡周辺は、昭和20年代頃から縄文遺跡を中心にして考古学的調査・研究が成されている。本遺跡から北東には中屋遺跡(15)、さらにその東には新保本町チカモリ遺跡⁽³⁾、南東には御経塚遺跡⁽⁴⁾などが存在する。いずれも北陸の縄文時代後晩期における標識遺跡として著名である。これら三遺跡は2km圏内に同時期に鼎立しており、本地域周辺が古来より人々の生活の場に適した環境を備えていたことを暗示している。このような時代を代表するような大集落に対して、規模の小さな集落も周辺には点在している。近隣の遺跡としては、上荒屋遺跡(19)、八田中ヒエモンダ遺跡(21)、宮永B遺跡(24)、横江A遺跡(32)、ジョウガン寺遺跡(35)などである。

弥生時代 後期以前の遺跡では、畿内第Ⅱ様式併行の櫛描文土器と条痕文土器が共伴する矢木ジワリ遺跡(16)が北東約1.5kmに存在する他、北西約1kmには矢木ジワリ遺跡と同じ様な土器様相を示す八田中遺跡群(22)が存在する。この他櫛描文土器を出土している遺跡は、下安原海岸遺跡⁽⁵⁾、上安原陸橋遺跡(10)、横江A・E遺跡(32)、御経塚遺跡群などがある。これらの遺跡は、金沢市と松任市の境界に沿って横江辺りまで入り込む浅い谷状の微低地を取り囲むように立地している。

弥生時代後期～古墳時代 弥生時代も後期になると当地域にもかなりの数の遺跡が確認されるようになる。本遺跡の西約1.3kmには、旭遺跡群一塚地区(旭小学校遺跡)(23)が存在する。平成元年度の調査で、当地と山陰地方との強い結び付きを示す四隅突出型墳や方形周溝墓、前方後方形周溝墓などが検出された。弥生時代から古墳時代への移り変わりを目の当たりにすることが出来る遺跡である。この他西には宮永B遺跡、倉部B遺跡(25)、竹松遺跡(26)などが存在する。また東には、13棟もの月影式期の竪穴住居跡や倉庫跡と推定される遺構が検出された御経塚ツカダ遺跡(御経塚B遺跡⁽⁶⁾)、前方後方形周溝墓などが検出された御経塚シンデン遺跡(36)や、御経塚遺跡などが存在する。

奈良時代～平安時代 本遺跡の南東に横江荘々家跡が存在する。東大寺領加賀郡横江庄は、平城妃朝原内親王家領であったが、内親王の死去の後、東大寺に施入された初期荘園である。これまでの調査により、主屋と見られる建物跡(五間×三間)などの庄家跡や、倉庫群の跡なども検出されている。また墨書土器を含む多量の須恵器・土師器の他、円面硯、下駄、櫛、桶、火鑽白などが出土している。この他周辺には、上安原遺跡(8)、中屋ヘシタ遺跡(14)、福増東川遺跡(29)などが存在する。

中世 周辺に宮永B遺跡、宮永市遺跡(28)、ゴクラクジ遺跡(33)、二日市インバシ遺跡(42)などが点在する。



第2図 周辺遺跡分布状況

-
1. 下福増遺跡（縄文～古墳）
 2. 下安原遺跡（縄文）
 3. 安原工業団地遺跡（弥生・平安）
 4. 安原工業団地遺跡（弥生・平安）
 5. 緑団地地下水処理場遺跡（弥生・室町）
 6. 緑団地公園遺跡（古墳・平安）
 7. 上安原緑団地遺跡（弥生～古墳）
 8. 上安原遺跡（奈良～平安）
 9. 上安原カナワリ遺跡（古墳）
 10. 上安原陸橋遺跡（弥生～古墳）
 11. 南塚遺跡（縄文後晩期）
 12. 南塚B遺跡（古墳）
 13. びわ塚古墳（古墳）
 14. 中屋ヘシタ遺跡（奈良～中世）
 15. 中屋遺跡（縄文後晩期）
 16. 矢木ジワリ遺跡（弥生中期・古墳）
 17. 矢木本町遺跡（縄文）
 18. 矢木マツノキ遺跡（弥生中期）
 19. 上荒屋遺跡（縄文）
 20. 上荒屋住宅遺跡（弥生）
 21. 八田中ヒエモンダ遺跡（縄文晩期～中世）
 22. 八田中遺跡（縄文～中世）
 23. 旭遺跡郡一塚地区（弥生～古墳）
 24. 宮永B遺跡（縄文・古墳・中世）
 25. 倉部B遺跡（弥生中期～後期）
 26. 竹松遺跡（古墳）
 27. 竹松C遺跡（不詳）
 28. 宮永市遺跡（弥生後期・中世）
 29. 福増東川遺跡（奈良～平安）
 30. 福増遺跡（縄文～弥生）
 31. あさひ荘遺跡（奈良～平安）
 32. 横江A～E遺跡（縄文～中世）
 33. ゴクラクジ遺跡（縄文・中世）
 34. 横江荘々家跡（弥生・平安）
 35. ジョウガン寺遺跡（縄文・平安）
 36. 御経塚シンデン遺跡（縄文後晩期～古墳）
 37. 御経塚経塚（不詳）
 38. 御経塚オッソ遺跡（弥生）
 39. 御経塚ヤトメ遺跡（弥生）
 40. 長池キタバシ遺跡（縄文後晩期）
 41. 長池ニシタンボ遺跡（弥生）
 42. 二日市インバチ遺跡（中世）
-

註

- (1) 扇頂の鶴来駅と扇端の松任市徳光町を結ぶライン。
- (2) 高堀勝喜、安村律義「石川郡安原村下福増遺跡調査予報」（『石川考古学研究会々誌』第5号、1953年）
高堀勝喜、安村律義「石川郡安原村下福増遺跡調査予報」（続）（『石川考古学研究会々誌』第6号、1954年）
沼田啓太郎「旧石川郡安原村中屋遺跡調査略法」（『石川考古学研究会々誌』第8号、1956年）
高堀勝喜「金沢市近郊八日市新保並びに御経塚晩期遺跡の調査」（『石川県押野村史』、1964年）
- (3) 南 久和『金沢市新保本町チカモリ遺跡—遺構編—』（金沢市教育委員会ほか、1983年）
- (4) 高堀勝期ほか『野々市町御経塚遺跡』（石川県野々市町教育委員会、1983年）
- (5) 岡本恭一、伊藤雅文『下安原海岸遺跡』（石川県立埋蔵文化財センター、1988年）
- (6) 吉田 淳『御経塚ツカダ遺跡（御経塚B遺跡）発掘調査報告書I』（石川県野々市町教育委員会、1984年）

Ⅱ 調査の経緯と経過

石川県内でも有数の米作地域である松任市一帯では、昭和50年代末頃から県営ほ場整備事業が積極的に施工されてきた。本遺跡の位置する同市中新保町地内も同事業旭地区中新保工区として事業が具体化し、昭和62年夏に施工予定区域内の埋蔵文化財分布調査について県農林水産部耕地整備課から石川県立埋蔵文化財センターに依頼がなされた。当センターは同年9月30日から10月1日にかけて施工予定区域内の試掘を実施した。調査の結果、施工予定地には広範囲に埋蔵文化財包蔵地が所在することを確認し、工事主体者である耕地整備課、石川県松任土地改良事務所と埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行い、排水路については事前の発掘調査、用水路・未舗装の農道・ほ場については盛土による田面高の調整等によって極力埋蔵文化財の保存を図る方向で調整がなされた。

排水路予定地の発掘調査は翌昭和63年と平成元年に、同課より依頼を受けた当センターが実施した。昭和63年度調査（第1次調査）は、同年7月25日から同年9月1日にかけて784㎡を対象（A～D調査区）に、平成元年度調査（第2次調査）は、同年10月16日から同年11月6日にかけて600㎡を対象に（E，F調査区）現地調査を実施した。また、出土遺物の整理、記録資料の整理を平成元年度までに実施した。

Ⅲ 調査の概要

1 調査区の名称、グリッドの設定

調査区域は排水路敷について掘削工事幅を勘案し、幅2mとすることとした。また、調査区域が狭長なために、排水路の屈折地点で調査区を分割し、AからFの6調査区に区分した。各調査区の基軸は排水路中心線とし、任意に設けた起点から10m単位で区分するグリッドを設定した。

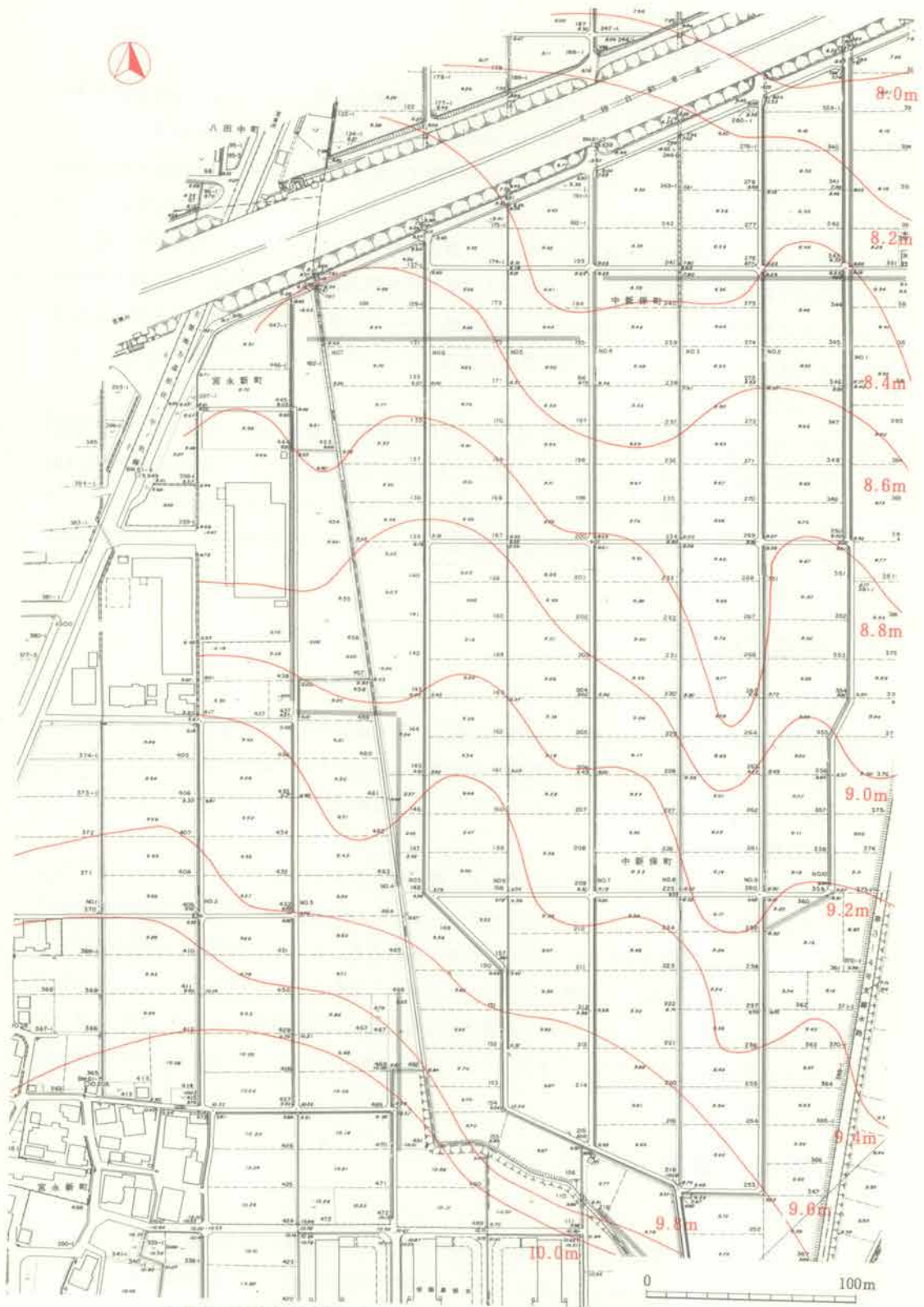
2 遺跡の範囲、立地

発掘調査区域が縁辺部の限られた範囲であるため、分布調査で広範囲に確認された埋蔵文化財包蔵地の中心部の状況に関しては不明な点が多い。おそらくは縄文時代晩期、弥生時代後期から古墳時代、古代の居住域が微高地のかたちで各所に散在するとともに、各時代・時期の遺物を包含した旧河道が幾筋も曲折した状態で分布しているものと推察される。現時点ではこれら遺跡群を峻別することが不可能なために周知の埋蔵文化財包蔵地「下福増遺跡」として包括的に扱っている。なお、各調査区で検出された旧河道については、第4図に表示した等高線にその痕跡を認めることができる。

Ⅳ 遺構、遺物

1 A調査区

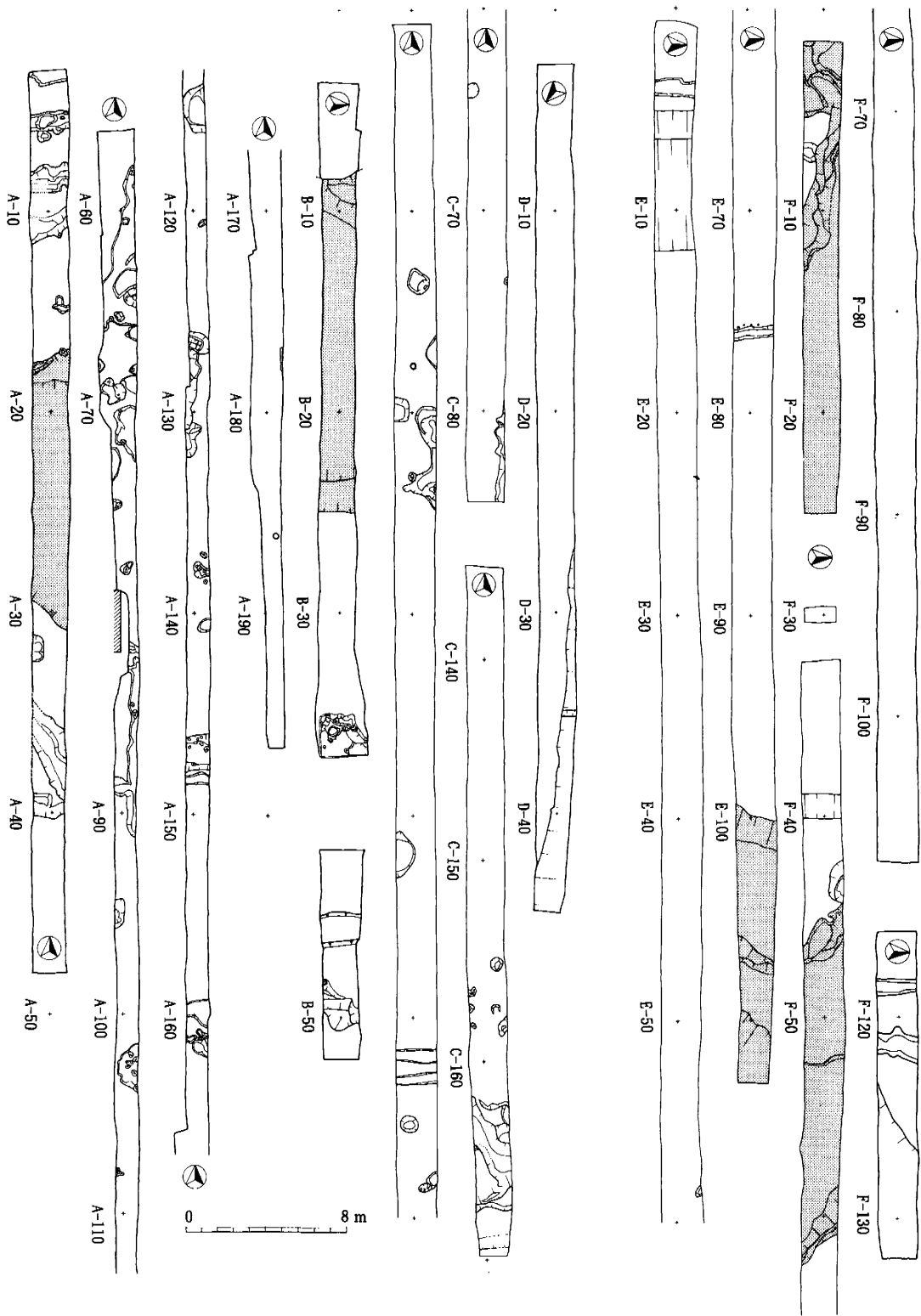
A-160以北に溝、自然河道、不定形な土坑が散在する。これら遺構の分布区域については地山土はやや粘性を帯びた細砂で水はけも良好である。南部では遺構はほとんど検出されず、地山土はかなり強い粘性を帯びている。遺構面上を黒褐色粘土ないし同色粘砂質土が覆っているが遺物の



第3図 下福増遺跡周辺地形図 [1/3,000] (県営ほ場整備事業着工前)



第4図 各調査区位置図 [1/3,000] (県営ほ場整備事業による新区画)



第5図 各調査区全体図集成 [1/320] (網線部は旧河道)

出土は僅かであった。各遺構とも出土遺物が少なく、時代・時期を特定することは困難であるが、一般的に縄文時代晩期ないし弥生時代中期以前に比定される土器細片や石器が比較的目立っており、該期の集落跡の縁辺部とみられる。

SD-A1, A4は近世以後の溝である。SD-A3は幅約10mの自然河道であって、地山面からの深さ約0.4m、底面の標高7.25mを測る。覆土には流木や腐食物を多量に含んでいる。縄文土器も出土しているが、時代・時期については不確定要素を残している。ただし、中世まで下ることはないものと推察される。

2 B調査区

調査区西よりで自然河道であるSD-B1が検出された。幅約16mの自然河道であって、ほぼ北流している、地山面からの深さ約0.8m、底面の標高7.85mを測る。覆土には流木や腐食物を多量に含むが、時代・時期の特定が可能な遺物は出土していない。覆土の堆積状況はSD-A3と同様に整然としており人為的な造作は感じられない。SD-B2は9世紀の須恵器片（第9図5）が出土したものの、覆土の状況からみて中近世の河道と推定される。本調査区からは遺物の出土は稀であった。

3 C, D調査区

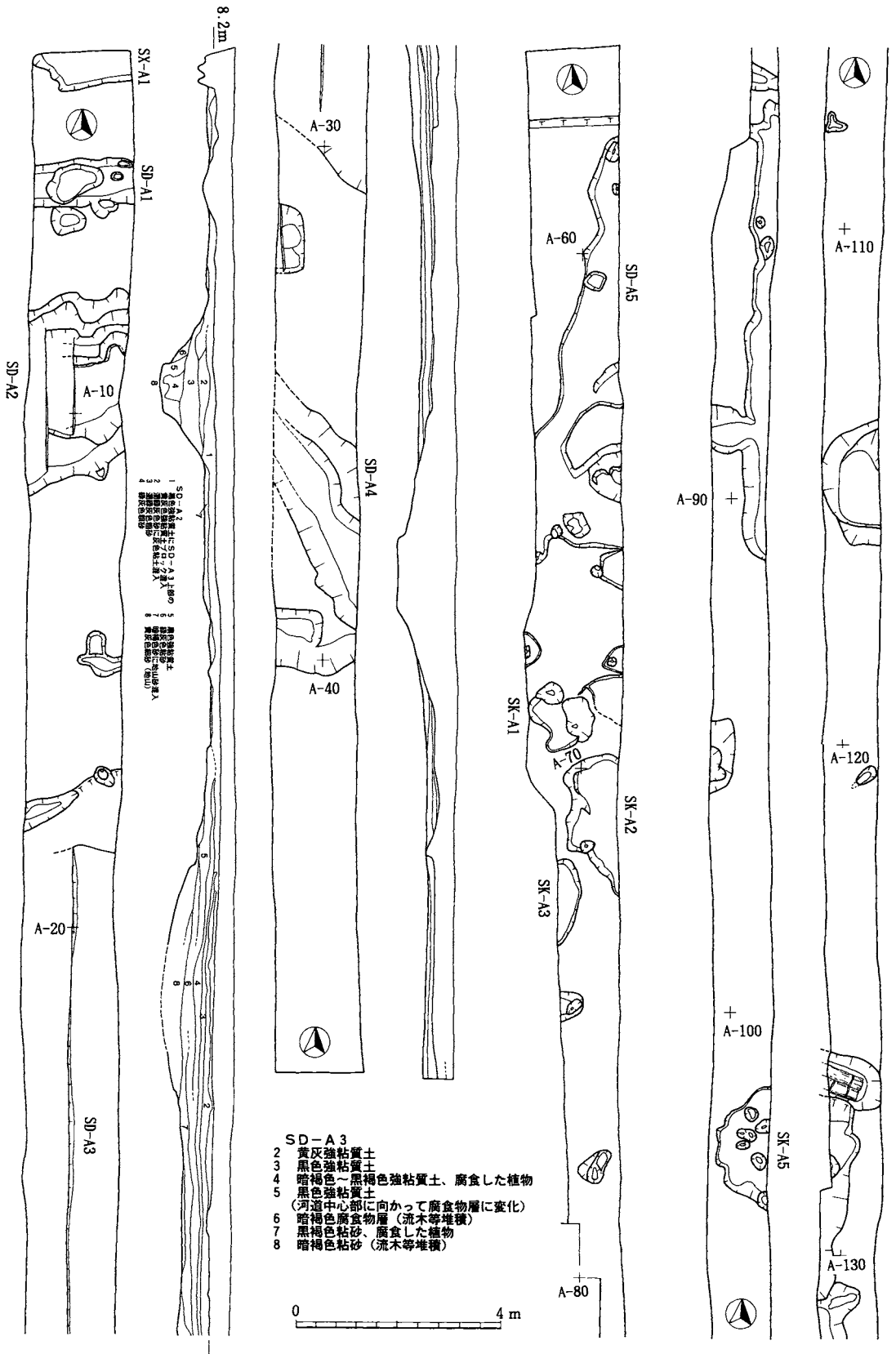
C調査区は地山面まで比較的浅く、微高地状の調査区であったが遺構、遺物は希薄であった。B-140以南は大規模な自然河道が所在している。調査区と河道が直交していないために、河道の規模は明らかではない。断面の状況からみて大きく時代・時期の異なる河道が複合しているとみられる。流木等の植物痕は少ないが、縄文時代晩期頃とみられる粗製深鉢や石錘等が出土した。

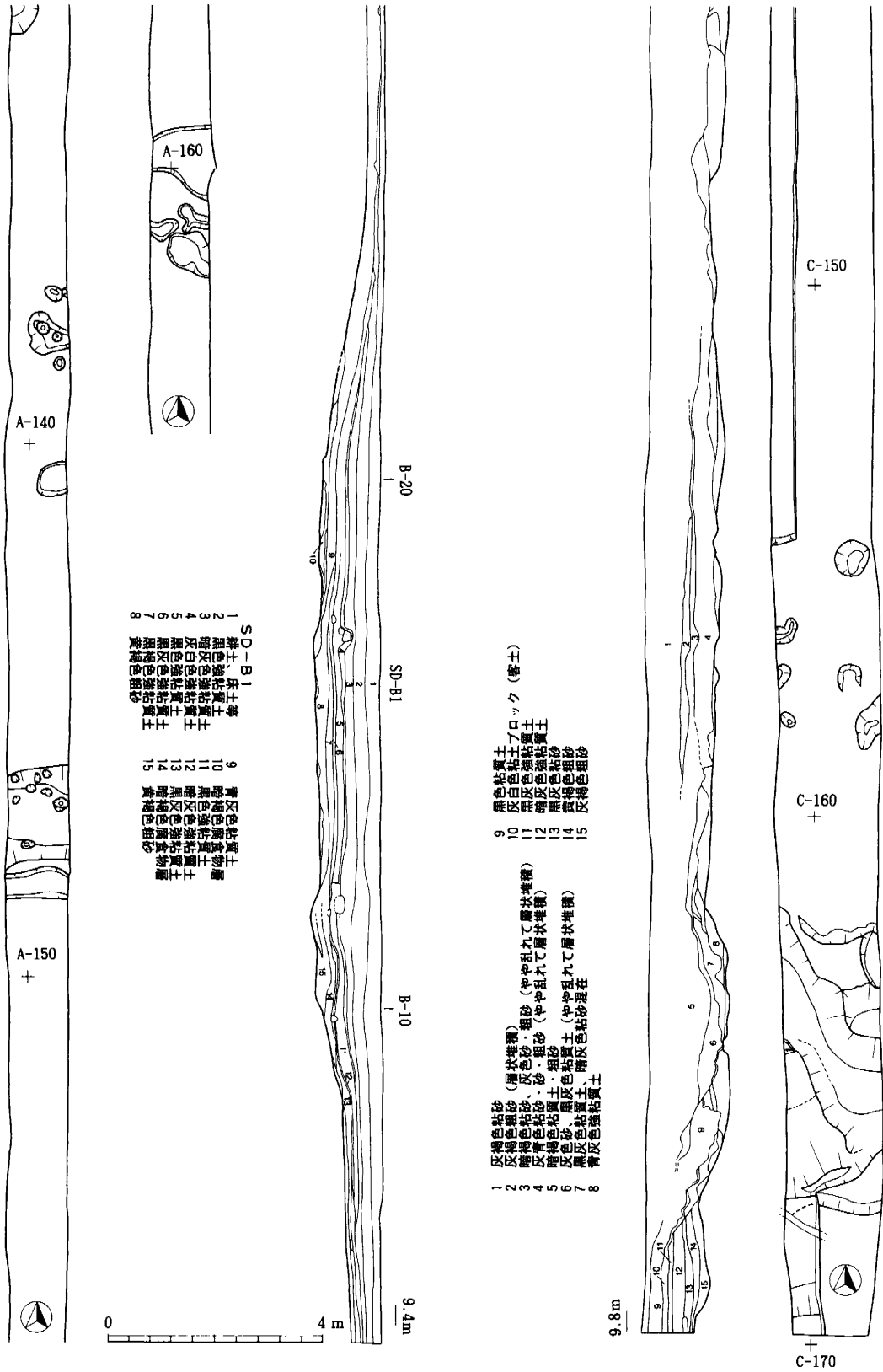
施工区域拡張に伴い、発掘調査とほぼ同時期に実施した補足分布調査の際、本河道西側に近接した中新保町466番地東部の試掘坑において須恵器を伴う遺物包含層を検出した。同試掘坑周辺部を精査したところ、小規模ながらもかなりの遺物を含む遺構面を確認した。付近の埋蔵文化財は盛土保存されることとなり発掘調査は行われなかったが、第10図17～21として掲載したように8世紀第四半期（長岡京併行期）の須恵器を主体としている。

D調査区もC調査区同様微高地状の地形を呈しているが遺物、遺構はほとんど検出されなかった。なお、北西部は現用水の堀方となっている。

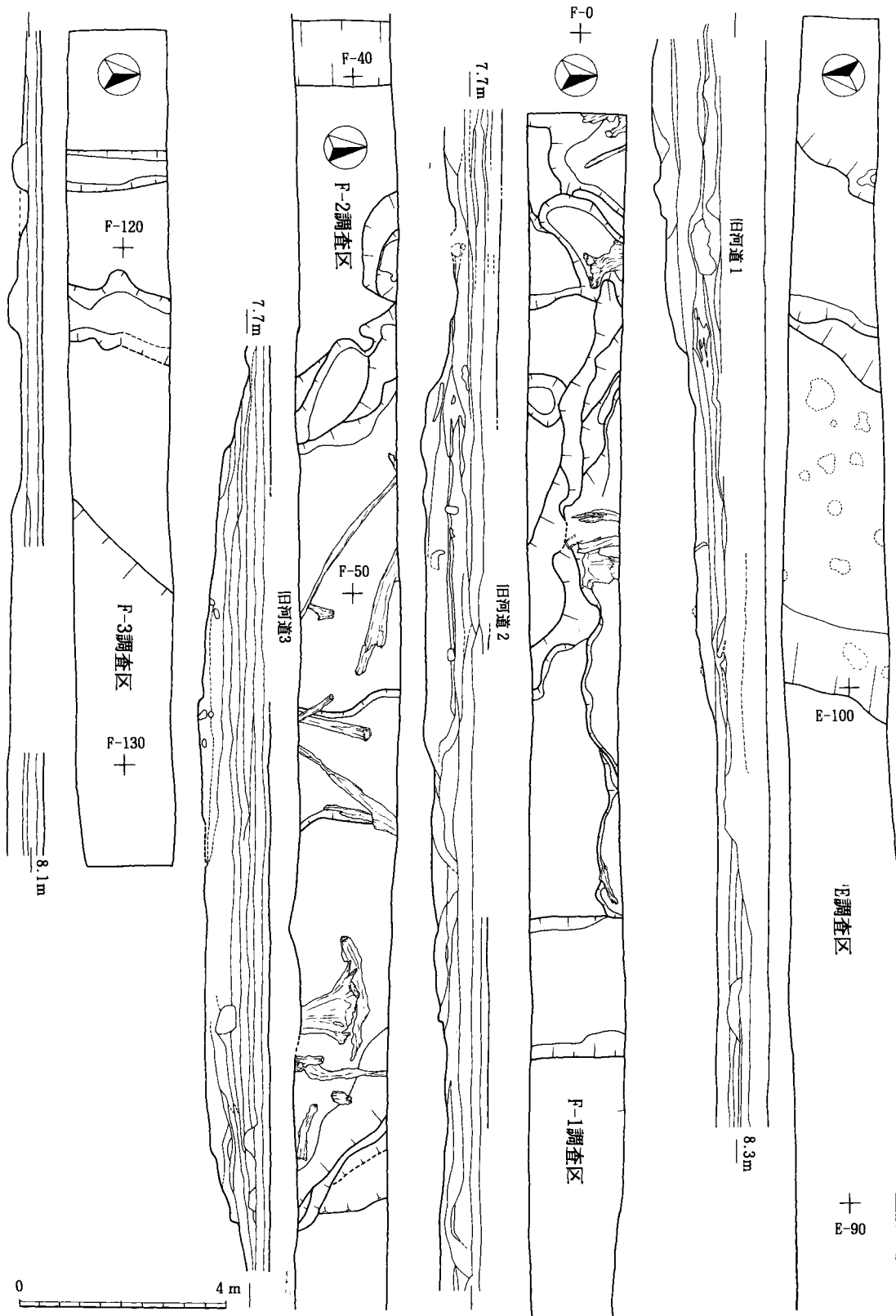
4 E, F調査区

東西方向約270mの区間に設定した調査区の3箇所自然河道を検出した。E-100～E区東端、F区西端～F-30付近に位置する河道1、同2は同一河道の余地を残している。川幅は不明ながらも、河道1は地山面からの深さ約0.9m、底面の標高7.0mを測り、同2は地山面からの深さ約0.7m、底面の標高6.75mを測る。覆土には流木や腐食物を多量に含むが、遺構の時代・時期の特定が可能な遺物は出土していない。F-45～60で検出した河道3は幅約10mの自然河道であって、北西方向に流れている、地山面からの深さ約0.7m、底面の標高6.95mを測る。覆土には流木や腐食物を多量に含むが、遺構の時代・時期の特定が可能な遺物は出土していない。ただし、縄文時代晩期の土器、および弥生時代以前の石器が一定量認められたことから、これらの出土状況を積極的に評価すればA, B調査区自然河道を含め同時代から中世頃までのかなり長期間にわたる

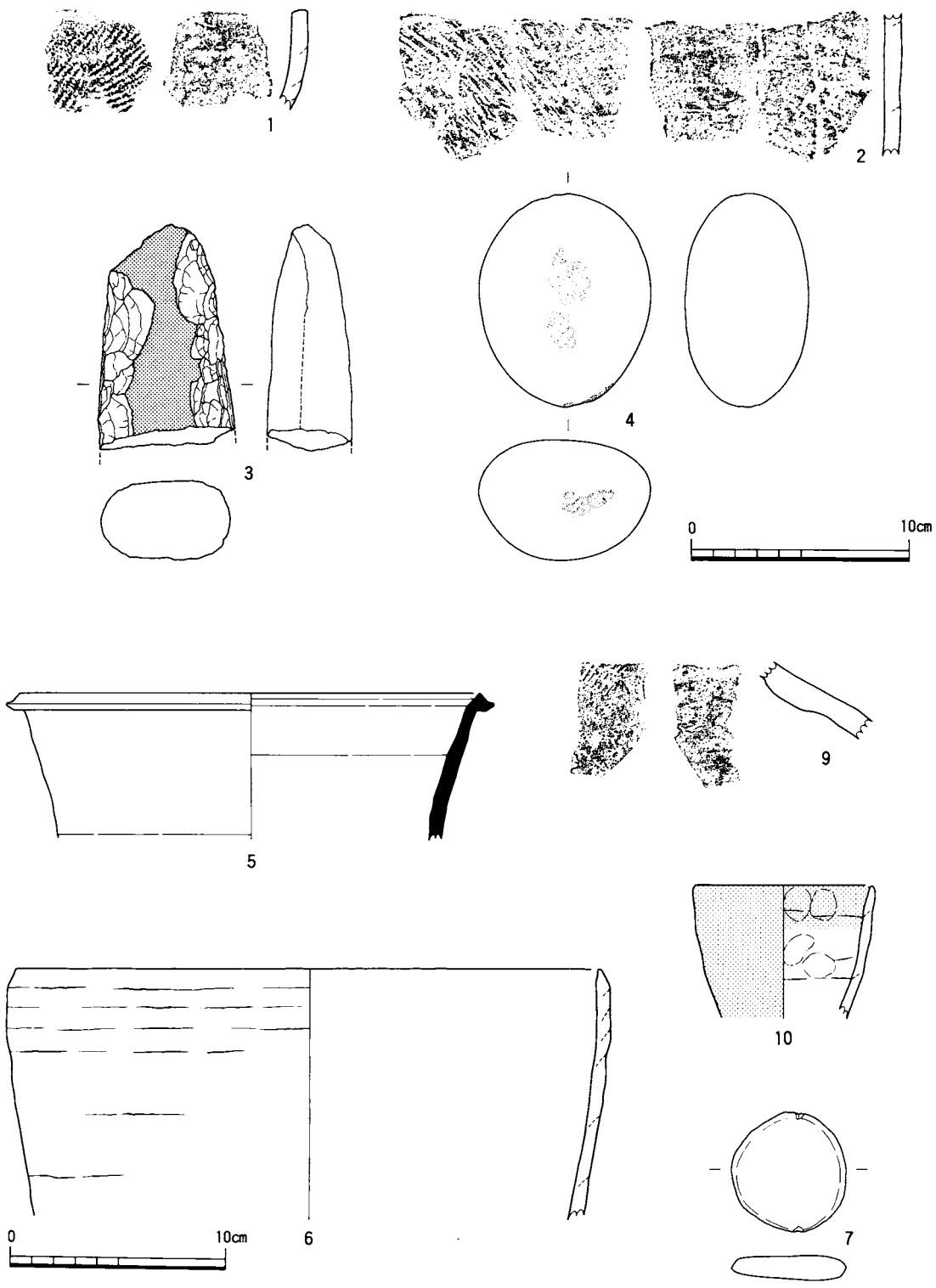




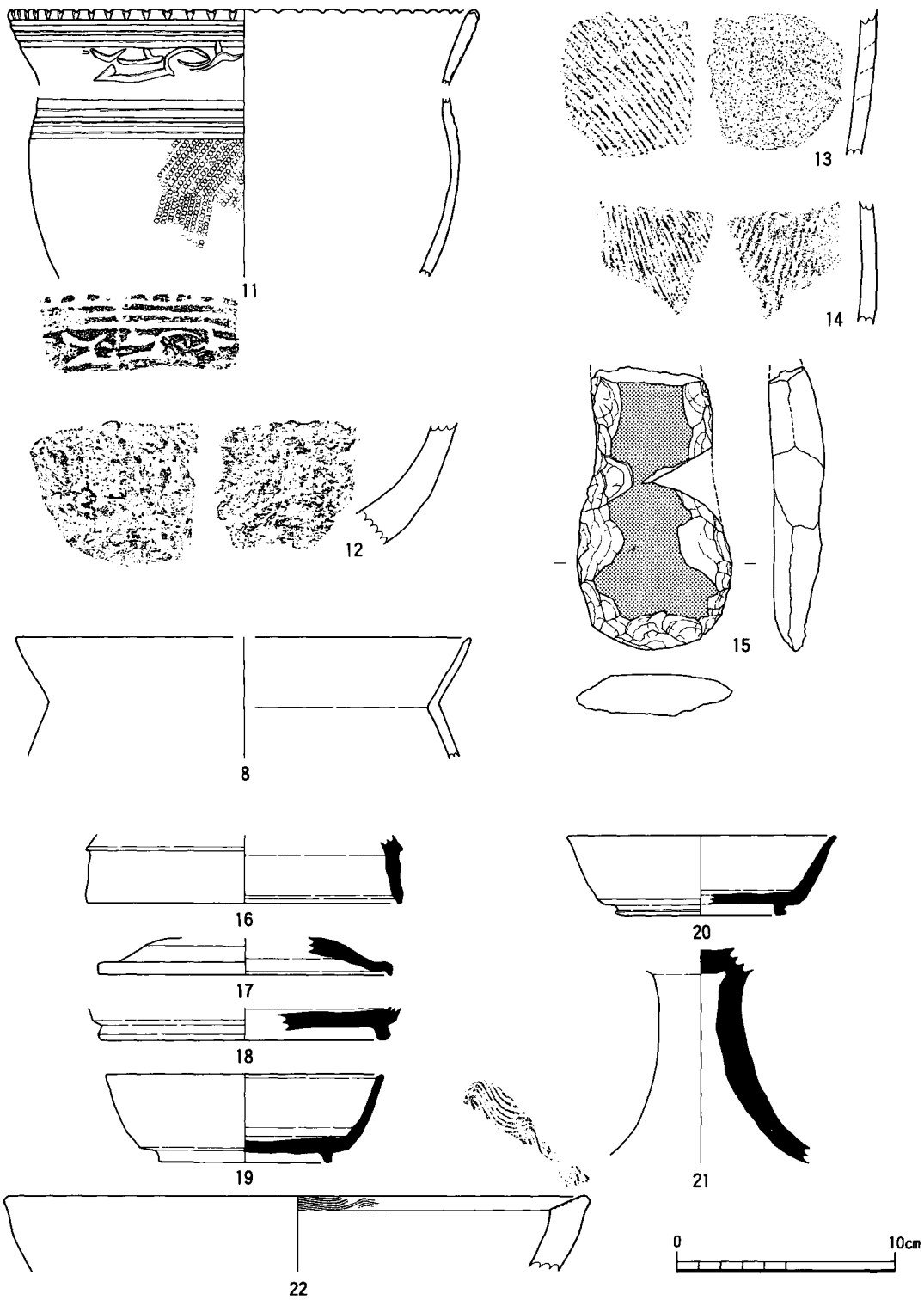
第7図 A, B, C調査区遺構図 [1/120]



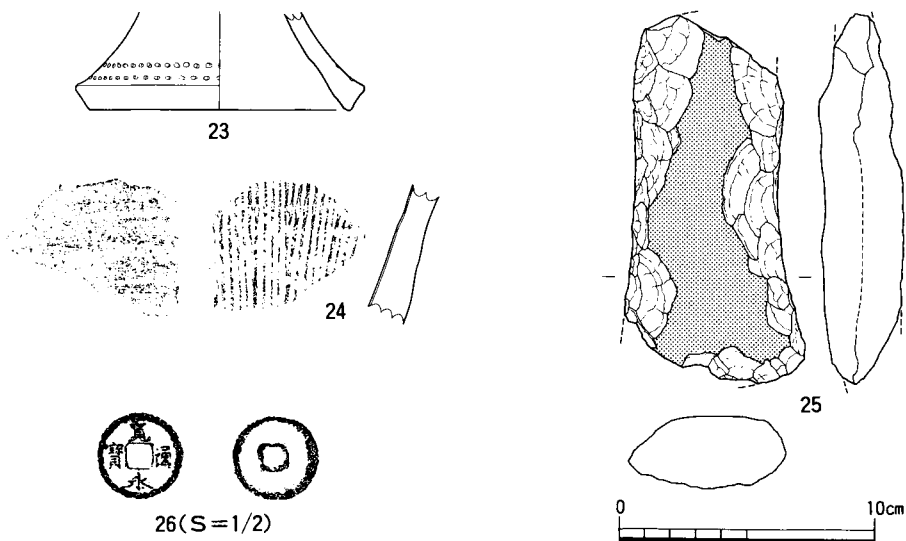
第8図 E, F調査区遺構図 [1/120]



第9図 各調査区出土遺物実測図(1) [1/3]



第10図 各調査区出土遺物実測図(2) [1/3]



第11図 各調査区出土遺物実測図(3) [1/3、26のみ1/2]

河道と推定される。

第9～11図掲載遺物一覧

No	出土地点・種別	No	出土地点・種別
1	SD-A5 縄文土器	14	F-1 調査区旧河道
2	SD-A3上部 条痕文土器	15	第2次調査区域
3	SD-A2上部 打製石斧または石斧未製品	16	中新保町 466番地試掘坑 杯蓋
4	SD-A3 凹石	17	" 杯蓋
5	SD-B2 須恵器甕(9世紀)	18	" 杯
6	C-150～155旧河道下部粗砂層 深鉢	19	" 杯
7	" 石錘	20	" 杯
8	E調査区旧河道1 土師器	21	" 盤
9	F-1 調査区	22	" 鉢
10	F-2 調査区	23	E調査区表面採集
11	F-1 調査区旧河道2	24	D調査区
12	F-1 調査区旧河道	25	A-0～5遺構検出面
13	"	26	A調査区



A調査区全景（北端（A-0付近）より撮影）



A調査区A-56以南近景（北（A-50付近）より撮影）



SD-A2 (南西より撮影)



SD-A3 [旧河道] (南西より撮影)



B調査区全景（西端（B-0付近）より撮影）



SD-B1〔旧河道〕（北西より撮影）



B調査区近世以降旧河道東岸（B調査区東端より撮影）



C調査区C-0～84.5近景（北端（C-0付近）より撮影）



C調査区C-130~150旧河道（南端（C-150付近）より撮影）



D調査区全景（南東端（D-0付近）より撮影）



E調査区全景（西端（E-0付近）より撮影）



E調査区旧河道1西岸（西（E-95付近）より撮影）



E調査区旧河道1西岸 (E調査区東端 (E-115付近) より撮影)



F調査区全景 (西端 (F-0付近) より撮影)



F調査区旧河道2 (F調査区西端 (F-0付近) より撮影)



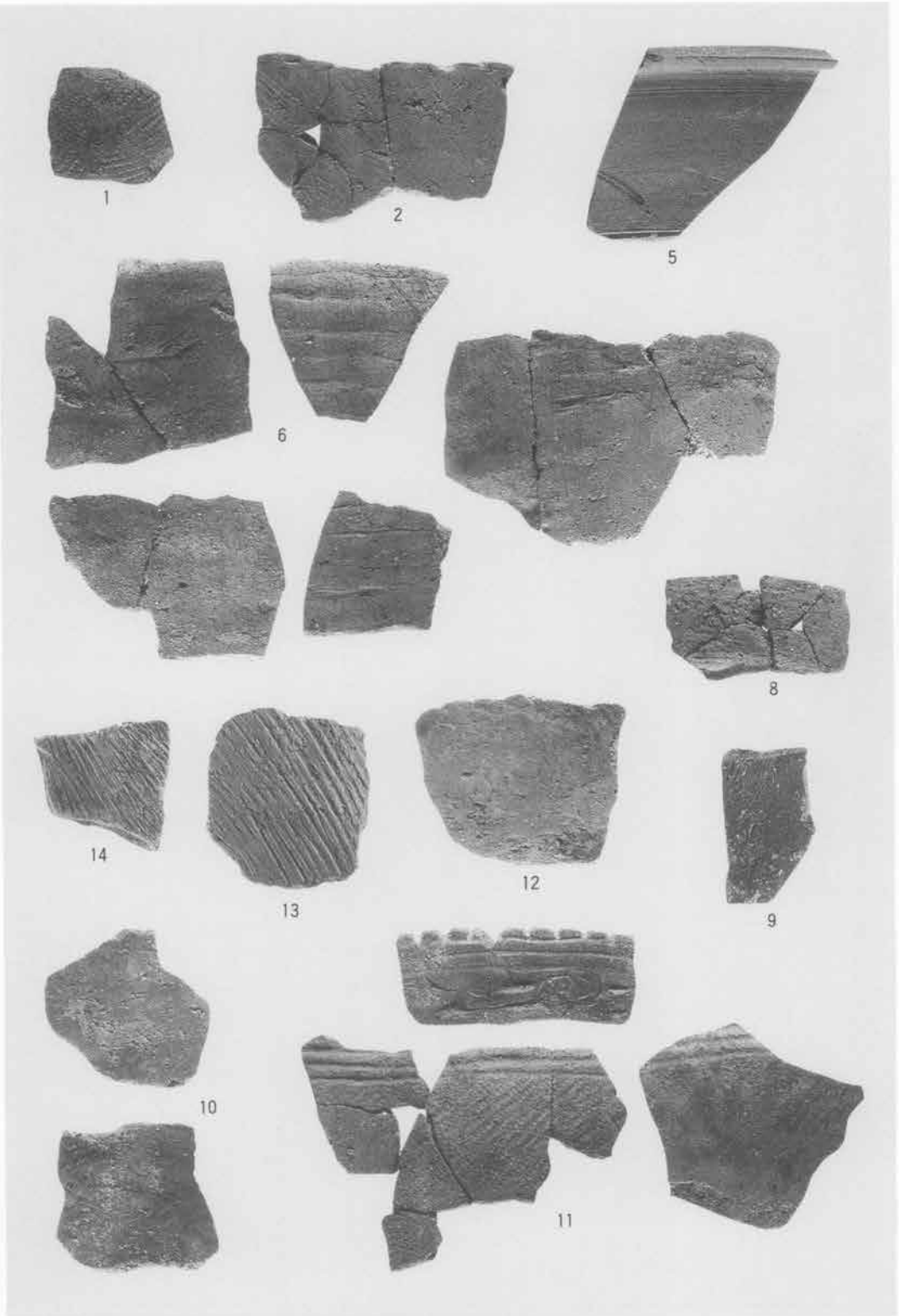
F調査区旧河道2 調査風景 (F調査区西端 (F-0付近) より撮影)



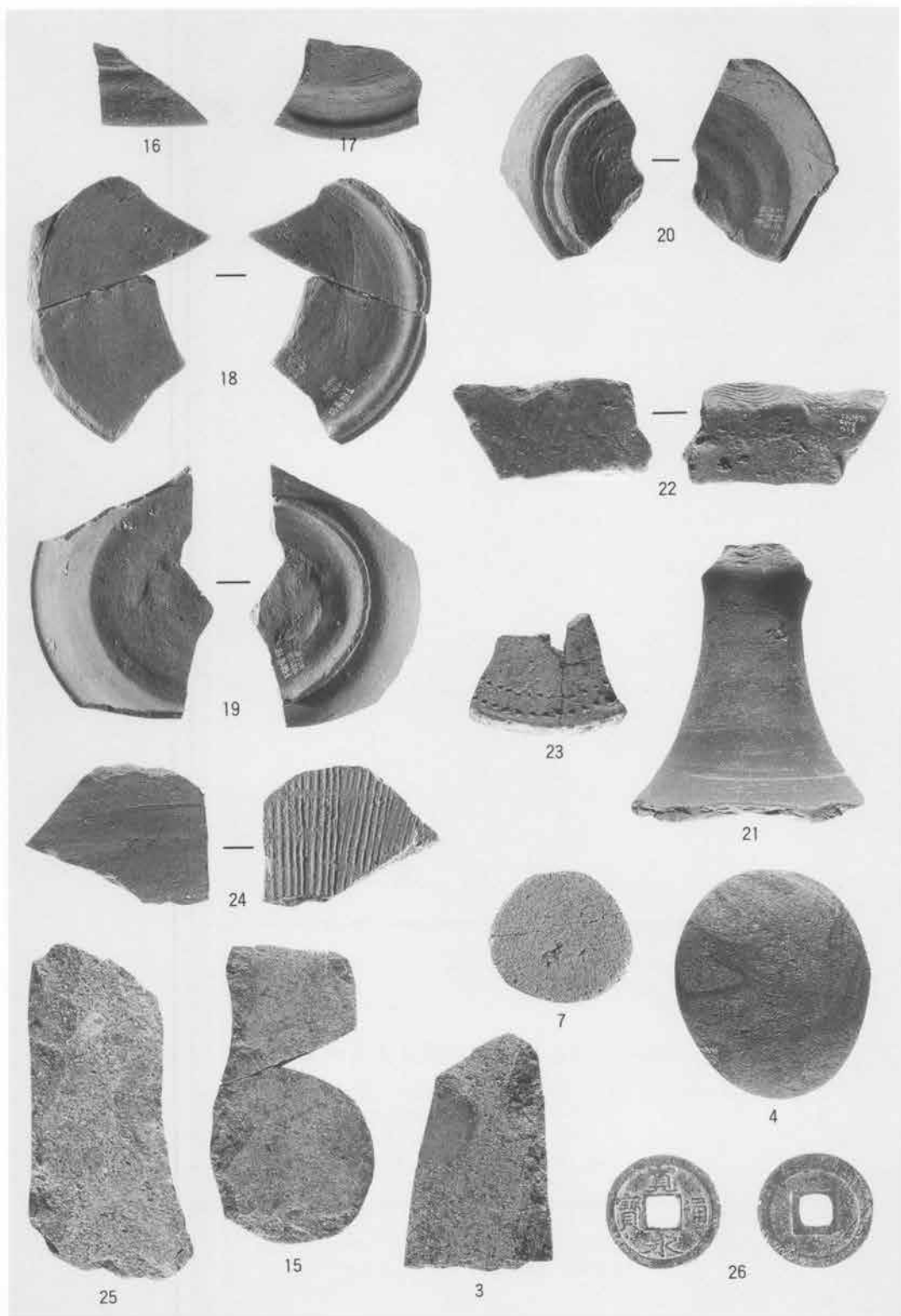
F調査区旧河道3（東（F-65付近）より撮影）



F調査区旧河道3 流木出土状況（北（F-55付近）より撮影）



各調査区出土遺物(1)



各調査区出土遺物(2)

下 福 増 遺 跡

平成 2 年 3 月 20 日 印刷
平成 2 年 3 月 29 日 発行

編集・発行 石川県立埋蔵文化財センター

石川県金沢市米泉町 4 丁目133番地
〒921 電話 (0762) 43-7692番代

印刷 北 國 書 籍 印 刷 株 式 会 社

©石川県立埋蔵文化財センター 1990
本文用紙：書籍用紙イエロー（中性紙）72kg